魅力再発見！　わが町の伝統文化

薩摩糸びな

素朴でありながら色彩豊かな雛人形は今も昔も変わらない子を思う親の気持ちを伝える

一本の割り竹を首、その先につけられた麻糸を後ろに垂らし髪に見立てた雛人形「薩摩糸びな」は、江戸時代に生まれたとされる鹿児島県の郷土玩具です。現在は県指定伝統的工芸品に登録されています。顔も手足もなく、本体は紙でできており、カンビナ（紙雛、神雛）とも呼ばれる立雛の一種です。

シンプルな作りですが、和紙や布を重ねて作られる着物は豪華。重ね襟は何枚もの色の調和が美しく、着物は幅広の紙にきらびやかな「垂れ絵」が描かれています。かつてはこの部分に、義経千本桜の静御前（しずかごぜん）と忠信（ただのぶ）、乙姫と浦島太郎、高砂の嫗と翁など関連した男女がペアになった図柄が描かれ、その絵で女雛と男雛を区別していました。顔がないことでかえってイメージが膨らみ、思い思いの表情を思い浮かべることができます。素朴だからこそ絵柄の美しさも引き立ちます。

戦前までは女の子が生まれた家に贈る習慣があり、桃の節句になると送られた糸びなをずらりと並べて飾ったという「薩摩糸びな」ですが、昭和初期に一度途絶え、近年復元されたそうです。今では糸びなを贈る習わしこそなくなってしまいましたが、朱、緑、金泥などをつかった色彩はとても華やかで、昔も今も変わらない、子を思う親御さんの気持ちが伝わってくるようです。

取材協力

小澤人形　新山禮子
TEL/FAX 099-226-0550